
自己中な彼女

由衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自己中な彼女

【Zコード】

N4334A

【作者名】

由衣

【あらすじ】

転校して間もない高校三年生の稲葉翔次はある日廊下で気にも止めていなかつたクラスメートの中居麻希と衝突（？）彼女が一番最初に話しかけてくれた言葉は『痛つたーい…歩けない！』しかし彼女学校一の有名な自己中女だつたのだ…何も知らない翔次は麻希に振り回され、ついには…！

出でいたくない運命

『つざけんじやね ！』

：その大声と同時に壁に何かがぶつかったもの凄い音が一軒家のあ
る部屋からした。

その声の主は少女のようだ。現在午後9時…ちょっと過ぎ。外は暗
闇に鎖され、あの声に吠えまくる犬をどこかのおばちゃんが窓から
ようすを見ていた。少女の部屋の下には自転車を押して歩いてた少
年が何事かと顔をしかめて上を見上げていた。

少年の名は「稻葉 翔次」この辺に最近引っ越してき
た高校三年。

おつかいを頼まれたのか自転車のカゴにはコンビニで買ったと思わ
れる牛乳が入っていた。見た目はつんつん頭で気が弱いのか、心優
しいのか分からぬ顔をしている。背は高いのだがやつぱりヒョロ
ヒョロしている。

しばらく立ち止まつていると翔次はまた自転車を押し歩き始めた。
：何故乗らないのだろうか…？

日が昇り翌日になった。

あの声の近所に住んでる生徒が楽しそうに話している。日常茶飯
事らしい。

『お前もあの声聴いたんだろ？』

『あの声つて…』

『あれ、稻葉君近いよね？ あそこから』

『あつ…ああ！ アレね、うん。聞こえた…あのつ何か…ざけんな
…つて声？』

何が言いたいんだ？ イツという視線を翔次に向けて話を盛り上げる
男子生徒。

『そうそー！ 特に昨日のはちょっと語尾が上がつてた！』

『ウチね？あの家の前通ったんだけどオマジ汚かつた！ってか人住んでんの？みたいな？』

『人がいなきや声は聞こえねエよ？』

『幽靈かもね。』

『

『もつやだ！稻葉君！アンタの方が幽靈みたいな顔してるわよ（笑）』

『あのー。結構それ傷つくんですけど…』

小声で訴えかける翔次の言葉は見事！…流された。

「つざけんじやね！…ネタ」は飽きたので翔次は廊下に出た。いろんな人でごったがえしている廊下を突き進むと突き当たりで人の女子生徒とぶつかった。…というか相手が勝手に転んだ。

『きやああ！』

どう見ても演技だろという悲鳴を上げる女子生徒に翔次は『大丈夫？』とお決まりのセリフをかけた。

目がキヨロキヨロしそぎだ。

女子生徒はまだその場に座つたまま下を向いている。嫌一な空気が2・3秒流れて女子生徒は顔を上げた。可愛い顔をしている。

『痛つたーい…歩けない！』

女子生徒の名は「中居 麻希」^{なかい まき} 翔次と同じクラス。

髪の毛を肩のちょっと下くらいまで伸ばしていて、顔は一流アイドル並の美人！しかし…ありえないほど性格が悪い。人は自己中と呼ぶ。

この一人。これからとんでもないことになる。

出でいたくない運命（後書き）

初めまして

初めて小説書きました！しかも恋愛ものですが、あんまりやつゆうの書かないんですけど、今回チャレンジしてみました

未熟者ですがよろしくお願ひします。（^_^;）

麻希観察

顔を上げた麻希はポカンと口を開けていつ言った。

『なんだ稻葉君か。』

何を期待していたのか…？麻希はわざと立ち上がり、スカートのほこりをはらつた。

『あれ？歩けないんじゃないの？』

『…………？』

麻希は翔次を軽蔑のまなざしで見つめると一ツコリ笑って何も言わず鼻歌交じりに教室へ歩いていった。

恐ろしい女だ。

それと同時にチャイムが鳴り翔次は気がつけば誰もいなくなつた廊下を慌てて走り出した。

麻希の席は翔次の左斜め後。翔次は何気なく麻希を見た。麻希は目が少し寄り目になりながら真剣にペン廻しをしていた。
それはもう真剣に…。

『はい、稻葉！』

『え？』

『いや、え？じゃなくて、早く問題解けよ！』

少し笑い気味に数学の担当教師がツツコミをいた。黒板には頭が狂いそうな数式がある。

『…………す、いません。あの～聞いてなかつたというか…』

先生はため息を吐くと『んじゃ中居』と麻希を指した。

麻希はペンを置くとかつたるそつに席を立ち、黒板にチョークでスラスラ解答を書きはじめた。

頭が良い。何故この高校に入つたのか分からぬ。
書き終えて麻希は席に着いた。そしてまた寄り目になり真剣にペン廻しを始めた。

そんなにベン廻しが好きか？

そんな様子を翔次は一時間ずっと見ていた。

休み時間になりクラスの友達が翔次のところへやつてきた。

『お前何さつきボケーとしてたの？』

『つてか後見てたからさあ、麻希見てたんじやねえ？』

『ウツソ　　！似合わない…』

『ちょっとそれどういう意味ですか？』

『でもさ…麻希はやめた方がいいと…』

『うんうん！俺も思つ』

『別にそういう意味で見てたんじや…』

『あ、でも見てた事は認めんだね？』

『あの女に騙された奴結構いるんだよね。』

『そつそつ…てゆーが口口にその馬鹿いるし…』

『つるせー黙れ（笑）』

『へえ　』

『つてか何稻葉君関心してんの？』

『男としてこの道は通つておくべきだよなあ？』

『オメーぐらいだよ引っかかる奴！』

『何？稻葉君麻希狙い気味？』

『いや違うつて…』

『おい！男として…』

『はいはい分かりました…でどうなの？』

『いやだから…』

『流れる会話に割つて入つたのは麻希だ。』

『あのわあ』

沈黙の嵐。

『稻葉君に用事…』

『……どうぞどうぞ、女王様。翔次王子をお連れくださいませ。』

男子生徒がふざけた。

『え、ちょっと…。』

本気で焦る翔次。麻希は翔次の腕をつかむと教室の外へと連れ出した。

皆は小声で『気を付けろ!』と叫んでいた。

麻希観察（後書き）

今日は会話だけです。
内容がおかしいかも……

お誘い… 実は？

『何何何？』

翔次は麻希に腕を引っ張られ屋上に連れて来られた。
そして翔次を自分の前に放り出すと『ねえ』と話し始めた。

『今日暇？』

『え？』

『だから、今日の放課後暇？』

『……うん、別に用はないけど……』

言いかけたところで翔次はハツとした。

そうだ…コイツはあの自己中女！放課後に呼び出されたりなんかしたら…何されるか分からない……………！
しかし前を見ると一ツ口リとした顔で麻希が立っていた。
『あ、あのさあ…』

『言つたよね？』

『は？』

『暇つて！』

『別に用はないと言つただけで…』

『 - 用はない - = - 暇 - のの - - - - 』

『あ、はい。…つて…そのオ』

『じゃあ4時ね！』

『え、何が…』

『駅で待つてるからね』

『いや、だからさ』

『んじや！そういうことで、絶対来てね』

強制的な別れを告げた麻希は一人屋上を下りていった。

教室に着くとクラスの誰もが翔次の所へ駆け寄つて來た。

『何された？』

『何つて…』

『なんか言われた?』

『4時に駅に来いと、 、 、 』

『うつわ ！キタ ！……』

『え? 何が?』

『麻希がゴキゲンに教室戻ってきたからだ、』

『何があるとは思つたけど…』

『デートの呼び出しどは…』

『デート?』

『しかもただのデートじゃないよ…地獄のデート』

『何それ。』

『んま、とりあえず財布が底を尽きるまで金を使わされるデートだよ

』

『つてことは…』

『あきらめな翔次。コレがお前の運命だ。』

『かつわいそ 一がんばつてね～』

『あ、ちょっと』

『いいよな。女は気楽で。』

『ま、麻希の獲物になるのは男だけだしな。』

そんな男子の孤独な会話を背に女子は『プリ撮りつー』だの『カラオケ行こう?』だの『いぶん平和なコミニコケーションが繰り広げられている。

……が、こんな女の世界だつて結構ドロドロしている。

『なあ。 淡路は中居に一回捕まつたんだよなあ?』

口を開いたのは翔次だ。麻希の捕らわれの身となつた淡路に声をかけた。

『ああ』

『そりやつこの単純馬鹿!』

『そん時…何された?』

『おいおい、楽しみを聞き出すのか? お前は…』

『頼む！教えてくれ！』

『土下座100回！…！』

すると翔次が席を立つた。

『いや、ホントにやるなよ！（笑）』

『ね、一生のお願い！』

『そこまでして知りたいか』

『うん』

淡路は時計を見た。

『待て。10分で話せる内容じゃない。帰りん時教えてやるよ』

『う…おう…』

『そんなすじいのか。

翔次は期待と不安の入り混じった返事をした。

昼休みに入った。

『……お前…アレだよ』

男子生徒が牛乳を飲みながら言った。

『何？』

間の抜けた返事をする翔次。

『中居に狙われてんぞ。きっと

『狙われてる？』

『うん。だつてこきなりデートのお誘いだぜ？あの女にしちゃ結構珍しいよ』

『いつもはどんな感じ？』

『一ヶ月くらいその男に付きまとつて、『今一つでときどきデートに誘つんだよ。ま、デートといつてもただのパシリ喰らうだけだけど

な』

『じゃあ俺つて』

『多分…好きなんじゃね？』

『え？』

『中居さ、好きな奴には速攻行く奴だから』

『… そうなの？』

『 気にすんなよ！あんな奴彼女にしたら一生後悔するぞ？』

翔次はなにやら変な顔をしている。

『 ほら、ただ気が弱そうだから別に付きまとわなくつたつていいとかかもしんねえだろ？』

そう言うと男子生徒は『ズズツ』 つと牛乳を飲んで去つていった。

俺のこと？

翔次は一人その場に立っていた。

お誘い…実は？（後書き）

何かコレってラブコメディみたいだ…

次話は淡路君（翔次のクラスメート）と麻希の悲劇のアートを書きます

一応楽しみにしててください…

淡路の恋物語

帰り道 。

翔次は淡路と話していた。

『 で、聞きたかったのは中居のことだろ?』

『 そつそつ…あ、あとで、お前一ヶ月くらい付きまとわれた?』

『 ああ、そうだな』

何で俺だけ…。

『 確か一年の初めくらいか?』

これは過去にあつた淡路と麻希の話。

淡路は理科室に向かうため、一人廊下を歩いていた。

荷物が多くつたせいですぐに筆箱が落ちそうになる。

階段を降りて行く途中とうとう筆箱が手元から落ちた。筆箱は階段を歩くようにスムーズに落ちていく。

それを追い、急いで階段を降りた淡路は持っていた教科書・ノートなどをすべてばらまいてしまった。

やばい…

淡路が必死に散乱した荷物を集めていると、横から細い綺麗な手がノートを持つて現れた。

『 あ…』

『 あありがと』

顔を上げると短い三つ編をした女子生徒が可愛らしい顔でノートを差し出していた。麻希だ。

『 はい』

『 あありがと』

麻希は片手で家庭科の教科書などを持ちながら散乱した淡路の荷物を一緒に拾っていた。

そのとき、予鈴のチャイムが鳴る。

『 遅れちゃうよ…』

『うん！今度から気をつけてね』

『あ…わかつた』

淡路は少しにやけながら理科室へ向かった。…がノートに挟んであつたレポートがないことに気づく。

淡路は慌てたが突然後から声がかかった。

『淡路君！』

振り返ると麻希が立っていた。

『レポート、忘れてるよ』

麻希の手にはレポートが握られていた。

『「めん（笑）』

淡路はレポートが見つかることよりも麻希に名前で呼ばれた方が嬉しかったのだ。

馬鹿だコイツ。

それからといふものの麻希は休み時間になつてからクラスの違う淡路のところへやつてきてた。

『淡路君。この前貸してもらつたCD忘れちゃつたの！今度でいい？』

『いいよ！いつでも』

『ありがとオ～あとさ、メールアド教えて』

『うん』

『じゃいつでもメールしちゃうね』

淡路は夢を見ているようだつた。

こんな優しくて可愛い娘とメール交換できるなんて…
だがそれも夢で終わるのだ。

麻希から送られてくるメールは決まって

ウチ今欲しいモ カゞあノレ ～

モウ誰カゝ買 ～～！

す＝”レゝカゝワレゝレゝーー” ～～ + ‘ w+ ”

（ウチ今欲しい物があるの～もう誰か買つて～！…す”）可愛い

バツグなんだ（）

というギャル文字満載。

淡路はギャル文字が理解できず、【そつだね】という答えしか返せない。

その度、【答えになつてない】と顰蹙を買つのだ。

それが重要なことだつた場合はもつと困る。

淡路が物理のレポートが終わつておらず、焦つて『いる最中』麻希から

牛勿王里 ポーー 糸冬わ + = ?

（物理のレポート終わつた？）

などというメールが届いた。

もちろん淡路にとつては嬉しいことだが（麻希は頭が良い）このギャル文字が分からぬ。

とりあえず【？】がついているから質問しているのだと分かり、【そうだよ】と訳の分からぬメールを送り返した。

メールだけではない。学校にいたつて

『きのオクロちゃんが脱走しちゃつて…やばいのオ

とギャル文字ならず麻希語が繰り広げられる。

自分の私生活を喋つて『いるのかテレビのこと』なのかもつたく分からぬ。

だいいちクロちゃんて何なんだ。

淡路はそんなこんなでとりあえず恋人気分で付き合つていた。

そんな五月のある日

『渋谷行こ』

と麻希が言い寄つてきた。

もしや…『デート？

と変な妄想をはたらかせた淡路は一つ返事でOKした。

悲劇の始まりだ。

休日に一人は駅で合流し、そのまま電車で渋谷に向かった。
車内でも麻希はメールに没頭している。脇からは【〒〒く】とい
う文字が見える。

例のギヤル文字だ。

『あ、あのセ』

『え?』

『その暗号みたいな文字は何?』

『え　　! 淡路くん知らないの?』

『ごめん』

『クク…いいよ知らないで(笑)』

その方が面白いといつよに麻希はメールを続けた。

アナウンスが入り、電車から下りると麻希の悲鳴が聞こえた。

『きやあ!』

見ると麻希のブーツのヒールが折れていた。

『あああ! 大丈夫?』

『どうしよ　　! 靴なきや歩けなあ　　い!』

『あ、じゅあどつかで靴買つてあげるよ』

『本当? ありがとう』

この女狙つてる。

7000円のブーツを買わされた淡路は次に

『ねエ見てみて! コレ可愛いよ　　!』

と洋服店に連れてかれた。

そのピンクのTシャツをしばらく見ると麻希は

『だめだ高つかい!』

とため息を吐いた。

そのあまりにも残念そうな顔を見ると淡路は財布を覗き込み

『いいよー買つてあげる』

と笑顔で言った。

『3200円です』

『うやらブランドものだつたらしい。

もう淡路の財布は小銭たちが身を寄せ合って震えている。淡路の手も震えている。

『あ … 』のブローチ欲しい 』

淡路はドキッとした。もう金はない。すると麻希はその店に入り、財布から万札を取り出した。

金あんじやん！……！

その財布の中にはまだ綺麗な夏目漱石たちが精悍な顔つきで並んでいる。

唖然とする淡路の前で麻希は

『お待たせ 』

と財布を振り回しながら店から出てきた。

すべてが終わった。今この瞬間。

夕方になり我が町に着いた淡路は麻希に向かつてこう言った。

『 … 』めん … 別れよつ。 … いや、君は何も悪くない。ただ… 』

『 … は？ 』

麻希は顔をしかめた。

『元々アンタと付き合つた覚えないし』

そいつ言つと『じゃね』と手を振り家へと帰つていった。

短すぎた恋。あの『はい』とノートを差し出す麻希はいなくなつていた。

『まあ … こんな感じだな』

『どんな感じだよ！ すごい初恋じゃん』

『うん！ まつたく今日は夢の早帰りだつづーのに災難だなお前』

『 … あ！ あと一時間ぐらいしかねエ！ … 』

翔次は走り出した。そんな翔次に淡路は

『金だけは払うんじゃね ぞ … … 夏目漱石と野口英雄は

大事にしまつとけ … … 』

と叫んだ。

淡路の恋物語（後書き）

ギャル文字が疲れました。
つてかあってないと思う。
というわけでギャルのみなさん確認ヨロシクお願いします。

悪夢のトーントー

時刻は午後4時15分。

いつもの町並みが並ぶ駅前。

翔次は一人突っ立っていた。とにかく突っ立っていた。
この15分間携帯も手いじりもしないで、横に手を置き突っ立っていた。

通りかかる人は一瞬

うおつ！びっくりした…マネキンかあ…あれ？人だつた

などという感想を抱き、平然とした顔で通り過ぎていった。

『お待たせえ』

ああ待つてましたよ。午後4時20分。麻希は小走りでやってきた。

お前絶対急ぐ気ねエだろという笑顔で翔次に話しかける。

『あんねエ…準備してたら財布ないの気づいてエ…やばかったのオ

！』

アンタはお金たくさん持つてるんだから財布くらい大事にしなさい。

『へえ…見つかった？』

『うん！なんとか』

『いくら持つてんの？』

『え…？聞きたい？』

『聞きたい』

『いくら？』

『想像にお任せします』

質問したのに質問で返つてくる麻希に翔次は呆れていた。

『もうんなコトドーでもいいから早く行こー！』

答えてください。

麻希は翔次の腕を掴むと走り出した。

まずはゲーセンへLet's goー!には数々のCFのキャラが並んでいた。

チヤリか立んでいた

麻希はすぐさまキティちゃんが入居している機会に向かつて歩き出した。

それはすべて俺の自腹？

「採れなしがもよ?」

え？ 稲葉君コレ探してくわんの？』

ゲツ…しまった！

木三はたた目標を見つめてるだけであつて攻撃の話は出していなか

『ちょー嬉しい』

ノノノ！ しゃあ一回たに

このリボンのかたな・り谷しげ

約二難ノ一ぞ

百円を四回奈落の底へと突き落とし、機械の合図を待つ翔次。

『よつしゃあ！來い！――！』

こーなりやヤケだ。

『がんばれ！稻葉君！！』

【 - - (1) のボタンを押してね - -】

『お安い御用!』

もう翔次はバ力の壁を半分乗り越えている。

【ウイ
ン】

当たり前のよう外れた。

『あーせつよつとだったのにイ…』

『残念！残念！おしかつたね。さあ帰ろー！』

翔次はその場を立ち去ろうとした。

失敗万歳！あきらめてくれ！

が、不意に後ろから誰かに掴まれた。振り返ると麻希がいる。

振り返ると麻希がいる。

『……何ですか?』

麻希がニヤッと笑う。

結局ゲーセンでHFOキャッチャー七回と、プリクラ三回、合計で3400円を使い果した翔次は、淡路と同じように、小銭たちを震え上がらせた。

『いや、君達は何も悪くない…ただ、英雄が…』

『何言つてんの? 稲葉君。』

『いや? 別に…』

『ああ 私おなか空いてきちゃつたなあ…』

『へーそう、じゃ早く帰ろ!』

『……』

麻希が冷たい視線で翔次を見つめる。

『はい、どこがいいの?』

『え いいの?』

『へつよく言つよ…』

翔次たちはハンバーガーショップに寄り、休憩した。

時刻は午後7時45分。

やつと帰れると思った翔次に更なる試練が待ち望んでいた。

懸夢のトーク（後書き）

ずいぶんと遅くなりましたが、五話が完成！！
大して誰も待つてないけど…
そんなワケで次話は「トーク後編（？）」です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4334a/>

自己中な彼女

2010年11月17日02時50分発行